

混合物の強さの度合

高橋速巳

株式会社カシェウエブレト

Caché et Wavelet, Inc.

hayami.takahashi@cachewavelet.jp

概要

小説を読んでいる途中で「何かについての印象が強化される」と言うことは適切だろうか. その何かというものが出来事等の混合物であり単純に一語で表されてはいないというときにはどうだろうか.

小説においては、「強化」というものは単独では終わらずに、さらにその「強化」されたものの影響を受け得る別の項に働きかけ、その項において変形や価値的な反転が生じる.

本稿では「出来事の混合物についての心象の強度」に関わる先行研究を取り上げる. ドゥルーズ「差異と反復」(1968)において「強度」「巻き込み」という概念、ドゥルーズとガタリ(以下 DG とする)の共著「ミル・プラトー」(1980)において「表現の形式と内容の形式の相互性、交錯性」を概観する. また実験科学の知見に少し触れる.

1 強化という事態の分解

日常生活で強化という語はスポーツや勉学においての能力の度合(程度)を高める(増す)ことの周囲で使われることがある. 語を縮めて書くと力の度合を高めるとなる. 力とは何だろうか. 強さという語を用い、強化のことを、強さの度合を高めると言い換えることもできる. 名詞の形態を取っている語「強さ」とは何だろうか. 強さの度合は強度と言い換えられる. 度合とは量だろうか. 量は、目に見えない事柄について言われる際、目に見えるものは関与しなくなるだろうか.

日常生活の中で強化という語を使う時、何か同じものの周辺で作業や操作を行う. その何か同じものについて、強さというような尺度がありその強さのようなものが測られている. そしてそこではその強さのようなものを増す、強度の度合を高めると言うことが目指される. そのように強化という事態においては、「同じ」というもの、「強さ」というもの、

「強さの度合」というものといった少なくとも3つの契機へ至る.

小説を読んでいる途中で何かについての印象が強化されているような感じ(Appendix)が生じることがある. その何かは、幾つもの出来事を経た複雑な事態のもとに存していることもある. あるいは、その混合物のようなものは、通常は、1つのものつまり一者性が生成されているものとは認知されないようなものであるかもしれない.

2 モデルの資格

廣松 [1] は構造主義を例に取りモデルというものへ警告を行っている. 「本源的には動的連関態 (= 作用的連関態、作用的連関) がもっぱら存在するだけ」であると述べ、「配位的構造」を「作用連関態の射影相にすぎない」とし、「構成諸部分や各々具有する諸規定性」を「作用的連関の反照的な分凝化的結節」とし、物象化の所産であるとする. その一方で、モデルは、叙述の便法として避けられないとも述べている. ドゥルーズと DG の多くの造語は、この「分凝化的結節」というものへあたるだろうか.

3 1968年の強度

用語の原語は [2]、英語翻訳は [3].

強度の三つの特徴 「一切の強度(原: intensité、英: intensity)は、差異的=微分的(原: différentielle、英: differential)であり、それ自身における差異(原: différence en elle-même、英: by itself a difference)である。」 [4]

齟齬(原: disparité、英: disparity)、強度、差異は同じものである.

「Every intensity is E - E', where E itself refers to an e - e', and e to t - t' etc. : each intensity is already a coupling (in which each element of the couple refers in turn to couples of elements of another order)」 [3]

強度には三つの特徴があるとされる。一つ目は、「強度量(内包量)(原: *quantité intensive*、英: *intensive quantity*)は、即自的に不等なもの(原: *l'inégale en soi*、英: *the unequal in itself*)を含んでいる。」というものである。強度量は、「量の差異において取り消し不可能なものを、すなわち量のそのもののなかにある等化不可能なものを表象＝再現前している。」二つ目は、一つ目の特徴の「ゆえ」に、「差異を肯定する。」ということだとされる。「強度は、少なくとも二つのセリーを基礎に、すなわち、上位のセリーと下位のセリーを基礎に構成されており、そのいずれのセリーもまた、潜在的な別の諸セリーを指し示しているのだから、強度は、もっとも下位のセリーさえ肯定する。」三つ目は、前の「二つの特徴の要約として」の「巻き込み(原: *implication*、英: *implication*)」というものである。

ベルクソンの強度概念批判 強度というものをベルクソンは批判している [5]。「質的進展が量的変化であると解釈されるのは、われわれが単一なるものを好み、われわれの言語が心的状態に見られる精妙な質的変移を言い表すようにはできていないからである。」「内的感情の強さは、常に、多くの単一状態の集合体を作り出す多様性に対応するものであって、意識はそれらをただ渾然たる一つの状態として認知しているだけなのである。」

ベルクソンにおいては「強度の観念は、本質的に異なった測定の入り混じった混交物を含むがゆえに、感覚はどれほど増したかという問いは、つねに巧く設定されていない問題に帰着することになる。」 [6] とドゥルーズは述べている。

「先験的な究明」というもの [4] 「わたしたちが認識する強度は、ひとつの延長(原: *étendue*、英: *extensity*)の内部ですでに展開して様々な質(原: *qualités*、英: *qualities*)で覆われてしまっている強度でしかない。」「感性の経験的な行使は、強度を質と延長のレベルでしか把握できない。」

二つのレベルの巻き込み、一次的には、差異がそれ自身において巻き込まれたまま、差異を包み込み続けていること、二次的には、強度が、強度を繰り広げる質と延長が、今度は強度を包み込むということを「発見できるのはひとり先験的な(原: *transcendantale*、英: *transcendental*)研究のみである。」とする。

「強度は延長と質のなかで展開されるのだが、その延長から独立してかつその質に先立って強度その

ものを把握するということ」を目指そうとする。物理学が「定常的であり続けるものが何か存在する」「同一的なもの」に着目していることに触れた後、「純粋な強度を、いかなる質も展開されずいかなる延長も伸展されない深い領域のなかに巻き込まれたままの姿で考えてみよう」と述べる。

「たとえば、強度は、本性上の差異と程度上の差異(原: *différence de nature et différence de degré*)のなかで消えるように見えても、とにかく強度が存在して、それが本性上の差異を質の中で、かつ程度上の差異を延長のなかで構成しうるのではない、ということにでもなれば、質的あるいは本性上の差異も、量的あるいは程度上の差異もともに存在しないということになってしまう。」という言い方をしている。

「記憶」は「強度というものの巻き込まれた潜在的レベルを、持続のただ中に再発見するものであるが、このような記憶の大規模な総合のなかにも、そうした(質－延長の)異化＝分化(原: *différenciation*、英: *differenciation*)の理由を見いだすことができる」とする。

巻き込み [4] 「巻き込みを完全に規定されたひとつの存在形式と理解しなければならない。」とする。「強度はすべて、巻き込みあっていて、それぞれが、他を包み込みかつ他に包み込まれている。」「強度としての差異は、延長のなかで繰り広げられることによって取り消されるときにも、それ自体においては巻き込まれたまま存在する。」「強度が繰り広げから独立しているのは、その繰り広げを決定する巻き込みというレベルから見てのことである。」

「理念」「異化＝分化」「繰り広げ」 [4] 「ひとつの理念(原: *Idée*、英: *Idea*)つまりひとつの多様体は、差異的＝微分的(原: *différentiel*、英: *differential*)な諸要素間の諸関係＝比(原: *rappports*、英: *relations*)の潜在的な共存によって構成されている。」「その関係＝比が、異化＝分化されることによって、現実化(原: *actualisation*、英: *actualisation*)される場」が、質や延長である。「現実化される理念に関して、異化＝分化という言い方をする。そして、展開され、まさしく現実化の運動を決定する強度に関して、繰り広げという言い方をする。」

「差異化＝微分化が、理念の潜在的な内容を規定し、異化＝分化がそうした潜在的なものの現実化ともろもろの解の構成とを表現している。」

「個体化」「異化＝分化」 [4] 「強度は、異化＝分化に対して独立しており、それは、強度に属し

ている個体化（原：individuation、英：individuation）というプロセスから見てのことである。

「強度」「理念」 [4] 「強度は、差異的＝微分的な諸関係＝比よりほかに何ひとつとして表現せず、前提もしない。個体は、諸理念以外の何ものも前提していない。」

明晰に表現するもの [4] 「強度は、すべて、互いに巻き込みあっていて、それぞれが、他を包み込みかつ他を包み込みかつ他に包み込まれている。その結果、強度はそれぞれ、諸理念の様々なに変化する全体、関係＝比の可変的な総体を表現し続けることになる。しかし、強度は、明晰には、それら関係＝比のいくつかしか、あるいは、それら関係＝比のヴァリエーションのいくつかの度しか表現しない。強度が明晰に表現するものとは、まさしく、強度が包絡するもの（包み込むもの）の機能をもつときに直接対象化するようなものである。それにもかかわらず、強度はやはり、すべての関係＝比、すべての度、すべての点を表現しているのだが、ただし、おのれの包絡されるものの機能において、混雑したかたちで、表現しているのである。」

「強度的な深さのなかにこそ、構成要因的なもろもろの齟齬、包み込まれたもろもろの齟齬が息づいている。」

ベルクソンへの反論 [4] 「先験的な究明」というものを経て、ドゥルーズは結論付ける。「ベルクソンの考察は、すっかりできあがった質と構成され終えた延長しか問題にしていない。」「ベルクソンは、強度量に帰属するものをすべて、質のなかに置き入れてしまったのである。」

一方、ドゥルーズにおいて「強度は、おのれを繰り広げる場としての延長と質を創造する。そうした延長もそうした質も、ともに異化＝分化したものである。」「差異は、その差異がそこで繰り広げられる当の延長のなかではじめて程度上の差異となり、またこの延長のなかでその差異を覆いにくる質のもとでのみ本性上の差異となる。」

4 1972年の強度

「アンチ・オイディプス」[7]では「諸強度は、強度ゼロの状態を起点として、すべて正の値をもっている。その値は、強度自身の相互の複雑な関係に依拠して、また、強度の原因をなす吸引（原：attraction [8]、英：attraction [9]）と反発（原：répulsion、英：repulsion）との力の比率の変化に依拠して、相対的に

上下する。」と述べている。「吸引」「反発」という語は、後の著作には現れなくなる。

5 1976年から1980年の強度

用語の原語は [10]、英語翻訳は [11]。

強度の母体 [12] 「強度は、器官なき身体（corps sans organes、以下CsO）の上に産み出される。」「CsOは、強度にしか占有されないし、群生されることもない」「強度だけが流通し循環する。」この時期、「強度」という語は、「強度が通る」というように、或るものが何かの場を通るかのよう表現されることがある。CsOはアルトーの「神の裁きと訣別するため」[13]という詩に似た奇妙な言表¹⁾に由来し、「神の裁き」はDGではイェルムスレウ由来の造語「地層（原：strate、英：stratum）」にあたる。

「存立平面（原：plan de consistance、英：plane of consistency）」「内在野（原：champ d'immanence、英：field of immanence）」は、あらゆるCsOの集合体である。連続的強度の地域をプラトーと呼び、CsOは「存立平面」の上で、他のプラトーと通じている1つのプラトーである。

スピノザの概念との対応 DGはCsOについての偉大な書物はスピノザの「エチカ」だとする [12]。

スピノザの「属性」という概念は、DGにおいては、実体であり、力であり、CsOのタイプであり、母体としての「強度」ゼロであるとし、同じくスピノザの要をなす語「様態」は、DGにおいては、生起するすべての事柄であり、母体から生み出される「強度」であるとする。

スピノザにおいては、様態の本質は、内在の様態であり、物理的実在であり、力の度合い、質のある度合い、ある量、強度量であり。諸様態は、量的にのみ区別される。その際、属性一質は、その形相的根拠を変えることなく、それを変様するすべての度合いを含んでおり、一義的にあるがままにとどまっている。また、諸属性の間にはいかなる種類の不等性もない [14]。このようにDGの「強度」という語はスピノザの「様態」に近い。

内容の形式 [12] イェルムスレウの「二重分節（原：double articulation、英：double articulation）」という考えの下、内容も表現と同じように形式をもっているということを強調する。

表現の形式と内容の形式の相互性、交錯性 [12] 「内容（原：contenu、英：content）の形式と表現（原：

1) 1948年2月に組まれていたラジオ放送は中止された。

expression、英：expression)の形式」は、「絶えずその切片(原：segment、英：segment)を交錯させ、一方の切片を他方の切片に組み込み続ける。」「これは、この二つの形式を派生させる抽象機械(原：machine abstraite、英：abstract machine)と両者の諸関係を調節する機械状アレンジメント(原：agencement machinique、英：machinic assemblages)によって可能になる。」

内容の形式と表現の形式とは、「非常に相対的なものであり、つねに相互的前提(原：présupposition réciproque、英：reciprocal presupposition)の状態にある。」

アレンジメント [12]「地層化の表面の方は、一つの機械状アレンジメントであって、地層それ自体とは区別されなければならない。アレンジメントは二つの層のあいだ、二つの地層のあいだにあり、したがって、一面では地層の方へと向かっているが、同時にまた器官なき身体、いかえれば存立平面に向かう一面ももっている。」「アレンジメントは、そのただ一つの側面においてのみ、言表行為のアレンジメントであり、表現を形式化する。それと切り離すことのできないもう一つの側面においては、アレンジメントは内容を形式化するのであって、機械状の、あるいは身体のアレンジメントなのである。」アレンジメントは、地層と地層の間にあり、脱領土化(原：déterritorialisation、英：deterritorialization)の度合にしたがって、変数をやりとりする。

抽象機械 [12]「表現の形式、内容の形式は、同じアレンジメントの2つの表面」であり、この表面よりもなお深い何か、前提しあう二つの形式、つまり表現の形式あるいは記号の体制(記号的体系)と、内容の形式あるいは身体の体制(物理的体系)とを同時に考慮するような何かに達しなければならぬのである。それをわれわれは抽象機械と呼ぶ。」

「抽象機械とは、純粋な機能(原：fonction、英：function)－物質(原：matière、英：matter)である。それは図表(原：diagramme、英：diagram)であって、この図表が配分されることになる形式(原：forme、英：form)と実質(原：substance、英：substance)、表現と内容とは独立している。」抽象機械は、「表現と内容の抽出などを遂行する」

抽象機械は、アレンジメントの先端のダイアグラムであり、同時に機能する線の集合である。

地層 [12]「抽象機械が地層に作用して、そこから絶えず何かを逃走させるような運動」と「抽象機

械がまさに地層化され、地層によって捕獲されるような運動」とがある。「地層が図表(ダイアグラム)の物質あるいは機能を捉え、表現と内容の二重の観点から、これらを形式化することなしには、地層は決して組織されない。それゆえ、おのおのの記号の体制、意味性や、主体化さえやはり図表の効果なのである。」

強度の連続体の産み出され方 [12] 抽象機械は、諸地層の形式と実質のもとに、互いに区別される形式と実質から、さまざまな強度を抽出し、一つの強度の連続体を作り出す。抽象機械は「脱地層化した記号－微粒子(原：signes-particule、英：particles-signs)を抽出する。」「言表(原：les énoncés et les sémiotisation、英：statements and semioticizations)の背後には、抽象機械とアレンジメントがあり、脱領土化の運動だけがある。」

6 実験科学

日常生活では、強化というものは、何か同じものを強めるようなことだと考えられている。その際「同じ」とはどのようなことだろうか。強化には触れていないが、鈴木[15]は「同じ」の周辺でゲントナーらの考えを紹介し考察を加えている。そのほか実験科学は記憶や印象について知見を蓄積しており今後当たりたい。

7 おわりに

小説を読み進めるうちに出来事が積み重なってできる心象の周辺で、ある印象の強化、同じもの、強さ、強さの度合というようなものを、どのように述べることができるのかという疑問がある。本稿では、強さの度合(強度)というものの先行研究としてドゥルーズとDGの強度という概念の調査にあたった。

また強化というものについては、何か同じものの強度が増すというふうになすと何を同じものとするかという疑問が出てくる。「同じ」ということについて実験科学に少し触れた。

ドゥルーズは「同じ」というものの周辺で「縮約」という契機に触れている。この語を次の調査にあてたい。

本稿の調査は、モンタージュのロジックの構築における操作の一部分である「強化」の根拠を探索する中で行われた。

参考文献

- [1] 廣松渉. 「構造変動論」 廣松渉コレクション 第一巻 「共同主観性と構造変動」 に所収. 情況出版, 1995.
- [2] Gilles Deleuze. 「Différence et Répétition」. Presses Universitaires de France, 1968.
- [3] Gilles Deleuze. 「Difference and Repetition」. Columbia University Press, 1994.
- [4] ジル・ドゥルーズ. 「差異と反復」. 河出書房新社, 1992.
- [5] アンリ・ベルクソン. 「意識に直接与えられているものについての試論」. 理想社, 2010.
- [6] ジル・ドゥルーズ. 「ベルクソニズム」. 法政大学出版局, 2017.
- [7] ジル・ドゥルーズ フェリックス・ガタリ. 「アンチ・オイディプス」. 河出書房新社, 1986.
- [8] Gilles Deleuze Félix Guattari. 「L'Anti-Œdipe」. Les Éditions de Minuit, 1972.
- [9] Gilles Deleuze Félix Guattari. 「Anti-Oedipus」. The University of Minnesota Press, 1983.
- [10] Gilles Deleuze Félix Guattari. 「Mille Plateaux」. Les Éditions de Minuit, 1980.
- [11] Gilles Deleuze Félix Guattari. 「A Thousand Plateaus」. The University of Minnesota Press, 1987.
- [12] ジル・ドゥルーズ フェリックス・ガタリ. 「千のプラトー」. 河出書房新社, 1994.
- [13] アントナン・アルトー. 「神の裁きと訣別するため」. ペヨトル工房, 1989.
- [14] ジル・ドゥルーズ. 「スピノザと表現の問題」. 法政大学出版局, 1991.
- [15] 鈴木宏昭. 「類似と思考」. 共立出版, 1996.
- [16] 椋鳩十. 「片耳の大シカ」. ポプラ社, 1969.
- [17] ジャック・デリダ. 「真理の配達人」 「絵葉書 2」 に所収. 水戸社, 2022.
- [18] デイヴィッド・ヒューム. 「人間本性論」. 法政大学出版局, 2011.
- [19] ジル・ドゥルーズ. 「経験論と主体性」. 河出書房新社, 2000.

A 片耳の大シカ

椋鳩十の「片耳の大シカ」[16]では、読者が読み進める途中のある段階に至ると、熟練の猟師とその相手となる大シカとの関係性が何か一種の高級なもののような様子にあることを感じるようになるように思われる。その印象は、初めからあるのではなく、猟師の発話を通して垣間見える狩る側の能力の細かい描写などを積み重ねるにつれ、その高いレベルの関係性の印象が高まっていくように思われる。また、読み進めるに連れ高まるように思われるその何かは、終盤に起きる別の出来事に起因して生じる或る心象の強さに、明らかに関与している。省略して述べるとすると、ある関係性が高まって強まり（仮に、強さ A）、その強さが、一見非常に異なるように思われる別の出来事から受ける心象の強さ（強さ B）を、強めるというような事態が生じる。本稿では、強さが、非常に異なる出来事の間で影響を持つ事態には触れない。

B 盗まれた手紙

ポーの「盗まれた手紙」[17]の次の箇所には、「私」から「私たち」への遷移がある。「私たち」には「私」というものを含めることができ、「奇」という点での繰り返しを、読者は認識するというようなことを言えるだろうか。

「私の友人にはひとつの奇妙な性向 (a freak of fancy) があった——ほかにどう言えばよいだろうか?——それは夜への愛ゆえに夜を愛することだった。そして私自身もこの奇癖 (bizarrie) に、また彼独特の他のあらゆる奇癖にも知らず知らずのうちに染まってしまって、彼の風変わりな奇行のすべてに心から身を委ねる (abandon) のだった。暗黒の女神 (the sable divinity) はつねに私たちと共にあるというわけにはいかなかったので、私たちは彼女 [夜] を模造したのである (but we could counterfeit her presence) .」

C システム間の語の輸入

DG の「強度」という語は、「ベルクソンへの反論」「巻き込み」「内容の形式と表現の形式の相互性、交錯性」などの考察を経た概念装置であり、DG 以外のモデルが輸入（移植、接ぎ木）を望むということは想定される。

諸システムの間で凡そ共通する基本的な面と、あ

るシステム（今は DG のシステム）に含まれる語（今は強度）とが、矛盾しないように、その語から、そのシステム特有の語義を捨象できるとき、そのシステムからその語を輸入する不当性は小さくなると言うことはできるだろうか。

捨象という操作に目を移す。任意のシステムが語の輸入を試み、強度に関してはベルクソンの説を採らずに DG の説を採ったとしても、時間における「過去」というものの取り扱いがベルクソンの説を採るといえることは考えられる。これは、概念と概念の間に、ある程度の独立性が想定できるように思われるためである。輸入の際、細かい部分において抵触が生じれば、概念上の部分が、捨象を試みられようとする資格を持つことが露わになる。この資格は、非一独立性を指摘される部分という資格も兼ねる。概念の上の部分の資格を露わにするこのような作業を重ねて行くと、一人の哲学者の所説を分解しブロック状にすることが進行するように思われる。「過去」というものについてのベルクソンの取り扱いを切り出してブロックにした際に、DG 対応済ブロック、ベルクソン純正ブロックといった形は想定され、概念のアクアリウムのような様子に仕立てることは考えられる。

D 疑問

巻き込み 「先験的な究明」のもとで現れた「巻き込み」というものは日常生活の中の何かの事象からの比喩の資格を帯びているのではないか。

属性 強度が変わる際、強度の母体は、スピノザの「属性」に類似した単位であると思われるが、この属性は、内容の形式において、どの部分となるのか。表現の形式と内容の形式とが交錯した複雑な出来事の場合、その中で或る属性は活性を持つか。埋もれたまま活性を持つ属性へ対して、後日、何かのせいで強まるといった作用は想定できるか。もしそうしたことを想定できるとしたとき、影響範囲は、その属性を埋もれたまま含む出来事全体の強度というものへも及ぶのか。

ヒューム ヒュームにおいて「関係は連合の原理 [18] の効果」であり「連合の原理の真の意味は関係の場合分けにある」とドゥルーズは述べる [19]。

「強度が通るのは、二項間に関係（近接、類似、因果）が存在する二項間である」と DG が述べていないのにはどういう理由があるだろうか。